

NPOパートナーシップ協力プログラム 事業終了報告書

団体名 海に見える命の森実行委員会
代表者名 後藤一磨

1. 事業名
東日本大震災体験伝承プログラムとして海に見える命の森3.11追悼セレモニー及び海森植樹祭と海森整備ボランティア事業
2. 事業カテゴリー
夢を応援・東北NPOパートナー協働事業/小規模事業
3. 事業期間 2025年2月21日 ～2025年3月31日(42日間)
4. 契約金額
500,000円
5. 担当者名
阿部 寛行
6. 事業目的
3.11海に見える命の森植樹祭、追悼セレモニー、森林整備ボランティアを通じ、地域の技能実習生や学生ボランティア、そして住民が協力して森を整備し鎮魂の祈りを捧げることで「誰もが語り部」を目指す
7. 事業の成果
今回の事業の成果としてまずは目的としていた次世代を担う若者達と町民とで持続可能なプラットフォーム創りが一歩前進できた成果が出来たという事である。
特に3月11日に開催された東日本大震災発災から14年となる日に、資金面で開催できていなかった3.11植樹祭と追悼セレモニーに町民有志35名、ミャンマー技能実習生106名、全国からのボランティア23名が一堂に会して協創出来た事は唯一無二の日でもあり、一期一会のご縁により絆が深まった日にもなった事がこの事業の成果となった。
続いて2月から予定通り5回開催した海に見える命の森整備ボランティアにおいても、こちらも予定通り243名参加していただけたことがなによりも事業の成果だといえる。
8. 事業種別(コンポーネント)ごとの成果
■コンポーネント①3.11海に見える命の森植樹祭・追悼セレモニー
3月11日に開催された東日本大震災発災から14年となる日に、資金面で開催できていなかった3.11植樹祭をCivic Forceとの協働事業により3年ぶりに復活できたことで全国から集まった学生達と地域住民とミャンマーからの技能実習生との三者が海に見える命の森に自分たちで協力し合って桜を植樹することが、はじめましての関係な中でもすぐに顔と顔が見える関係となっていた。文化や言語のカベも超えた「お互い様の関係構築」が、東日本大震災が発災した3月11日という唯一無二の日に千年活きるといわれているエドヒガンという品種の桜を植樹することは参加者全員が自分事として誰一人他人事でなく三者のチームで丁寧に植樹を会話も弾みながら楽しんでもらえたことは何よりであった。
海に見える命の森での全国からの学生達とミャンマーからの技能実習生との交流においては、短い時間ながらも積極的にたくさんの交流が生まれており、中にはこの交流会によって連絡が取れる関係もできており、あの日には想像もしていなかったミャンマーの大地震についてあの日参加した8割の実習生の故郷が被災しており、なんとか学生達も力添えできないかと相談されるなど他人ごとではない自分毎にしてくれる学生も現れて交流会を開催したことに本当に良かったと思える交流会となった。
3.11追悼セレモニーは、東日本大震災から14年の月日をかみしめながらも令和元年にミャンマーから寄贈された南三陸大仏様に献花と手を合わせる事によって一人一人が東日本大震災という未曾有の大災害にて命を亡くされた方々、いまだに行方不明な方々、その方々のご遺族やご家族の方々、親せきであったり友達であったり、たくさんの3月11日という日に真剣に鎮魂の願いを厳かに開催できた。
14時46分のサイレンに合わせて海に見える命の森の目の前にある志津川湾に手を合わせる事で、更には自然の恩恵と脅威は表裏一体であると同時に人間がいかに自然との共生の道をまい進しなければならないのか、たくさんの命が亡くなった志津川湾に手をあわせながら人間の命を犠牲してまでの教訓が今後二度とあってはならないと肝に銘じたセレモニーでもあった。

■コンポーネント②海の見える命の森整備ボランティア

海の見える命の森主催のプログラム参加者の約8割が学生であるため、多くの若者が訪れる一方、リピーターになる割合は非常に低いという課題がある。その点で、現地で学んだことを持ち帰り実践できているかどうか、現地で感じた想いを持ち続けることができているかどうか捉えがたい側面もある。学んだことをその後の日常で活かせるよう継続的に情報を発信していくこと、プログラム参加後の双方向の情報共有、被災地で学んだことを何度も学び直しに足を運んでいただくこと等、今後更に取り組むべき課題があると考えていた中で、今回の2月からの海の見える命の森整備ボランティアにおいては、東京、大阪、宮城など、全国からオンラインにて有志学生が広報活動を実施している中で、今回の海の見える命の森整備ボランティアに参加した中から高校生2名、大学生5名が新たに広報部に入会した。広報部メンバーの多くが、プログラムに参加したことをきっかけに「三陸の今を知ってほしい」「同年代の人達に備災について考えてほしい」等の想いをもち、積極的に活動に参加している中で、今回は高校3年生、大学4年生が卒業というタイミングで広報部も退部することもあり、新たに7名加入したことは今回の事業の成果の一つといえる。

また、震災後から継続して福岡県の高中生200名が三陸に足を運びボランティアを通じて自然との共生やライフラインが途絶えた状況での対応を学ぶと共に、各伝承団体の語りや震災遺構から東日本大震災について深く考えている。以上のように、全国の若者が海の見える命の森のプログラムを通じて東日本大震災や三陸の現状を知り、個人が自分にできることを考え、様々な形で周囲に発信していると言える。

9. 事業全体を通じて得た教訓や課題等

海の見える命の森創りが手弁当で継続してきた取り組みであり、参画している地域住民も高齢化が進む中、資金面でも人員体制的にも継続が難しくなってきた中で、これまで実施してきた3.11植樹祭や追悼セレモニーは、地域内外の人が震災と向き合い、思いを馳せるための大切な場であるが、これも継続の危機に瀕していた。植樹祭や追悼セレモニーは自ら参加することで愛着が生まれ、南三陸町に足を運ぶ理由となることから、継続していくことが大切である中で今回の事業によって新たな機運として地域にはミャンマーからの技能実習生が大勢いる中で、彼らにとっての地域住民との交流の場、そして学生にとっては震災について学びながら国際交流ができる場を設けたことで、南三陸町に足を運んでもらうきっかけを作り交流人口を増やす取り組みをこれからも継続していきたいと考える。

10. 協力体制の構築

- ・海の見える命の森実行委員会(南三陸町)実施主体
- ・㈱阿部長商店(気仙沼市)ミャンマー技能実習生実習企業送迎
- ・南三陸町林行政区町内会(南三陸町)3.11植樹祭・追悼セレモニー参加メンバー
- ・南三陸ホテル観洋(南三陸町)3.11植樹祭・追悼セレモニー参加メンバー
- ・三陸復興観光コンシェルジュセンター(南三陸町)全国学生ボランティアコーディネーター
- ・友定(埼玉県)ミャンマー技能実習生コーディネーター

11. Civic Forceとの協働について

今回の事業によりミャンマーの技能実習生と協力して植樹やお互いの事をより深く知る為に交流することで、多文化共生の理解が深まる事が出来た。また、海の見える命の森では震災で失われた緑を取り戻す活動が、植樹をすることで地元のシンボルとして育ち、地域の誇りとなる事もCivic Forceとの協働により今回の事業が出来た事で実現できた。

森林整備ボランティアは、海の見える命の森のプロジェクトが始まった当初から今まで10年間継続して行われてきた活動であるが、これまでに森のボランティアに参加した人は10,000人以上にも及んでいたがコロナ禍により大幅にボランティア数は激減しており命の森の整備はできない状況にまで陥っていた中で今回の事業により、243名も参加していただけたことがなによりもありがたいことで、参加者にとっても自分毎として東日本大震災後から今まで続いてきた森の整備に関わるボランティアの一人なのだという達成感を得て頂けている感想も聞けて、また海の見える命の森に足を運ぶ人たちに繋がれる可能性を感じられ、やりがいを感じながら作業していただけた。海の見える命の森の森林整備に携わることで、南三陸の大自然にたくさん触れて、人と人との繋がりを大切にし、次代を担う若者達へとバトンを渡すことの想いを繋げられたことは、偏にCivic Forceとの協働していただけた事であると得心して、これからの海の見える命の森創りに尽力する所存である。